

## 未発表資料 小川未明・坪田譲治書筒：翻刻と解題

著者	山根 知子
雑誌名	清心語文
号	21
ページ	62-80
発行年	2019-11
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000459/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000459/</a>

## 未発表資料 小川未明・坪田譲治書簡

### —— 翻刻と解題 ——

山根 知子

はじめに

小川未明（本名 小川健作 一八八二（明治十五）年—一九六一（昭和三十六）年）と、坪田譲治（一八九〇（明治二十三）年—一九八二（昭和五十七）年）との師弟関係については、これまで両者の随筆や年譜等での言及もあり、大筋は知られているところであるが、その具体的交流とお互いへの心情の詳細については明らかにっていないといえる。

これは、小川未明、坪田譲治ともに、これまで書簡集が公表されることがなかったためでもあり、両作家のお互いに対する書簡については、未だその存在の確認を含め研究はなされていない。

今回は、これまでの調査で存在が判明した吉備路文学館と小川未明文学館（上越市）の二館が所蔵している書簡について、

翻刻し解題を付すこととする。本稿で発表する書簡の点数は、吉備路文学館に所蔵されている坪田譲治あて小川未明書簡が十八点（O1～O18）、これに、未明没後の未明忌世話人会による譲治あて書簡一点（O19）も加えて、合計十九点である。一方、小川未明文学館に寄託（小川家所蔵）されている小川未明あて坪田譲治書簡は五点（T1～T5）である。

#### 翻刻

凡例

- ・旧漢字・旧仮名遣とともに、書簡の表記通りとした。
- ・書き間違いについては、そのままとし、ママ表記を付した。
- ・判読し難い文字については「」内にその旨を記した。

【坪田譲治あて小川未明書簡】（吉備路文学館蔵）  
書簡O1 一九一〇（明治四十三）年六月三十日

「消印」 牛込／43・ 6・ 30／后11・12

「葉書」 大日本帝國郵便 一錢五厘郵便はがき

「筆記具」 黒インク

「葉書表面」 岡山市西口嶋田／坪田讓<sup>(注1)</sup>二様

東京牛込早稲田南町／五一／小川健作

六月三十日

「葉書裏面」

遂にとられましたか。私は大丈夫と思つてゐたがやはり駄目でした<sup>(注2)</sup>。身體をきたい、經驗を積むと思つて行つて来たまへ。一年位は直<sup>ママ</sup>ぎたつてしまひます。君は、もう東京へ今年中はお出せんか。試験を受けに来ませんか。何事も深く考へたつてし<sup>(注3)</sup>かたがない。暑さ時分身<sup>ミ</sup>軀を大事にしたまへ。先づ當面一歩一歩運命に隨つて行くなり、人生は仕方がないと思ひます。「約五文字分不明」になりました。

注1 「讓二」という表記は、学生時代の讓治自身が戸籍上は「讓

治」で届け出ていることを認識する時期まで使用していたことから、未明にも使われていたものと思われる。

2 このとき、未明は二十八歳、讓治は二十歳で、早稲田大学英文科本科一年に進級した年だった。この書簡後の

一九一〇（明治四十三年）十一月から翌一九一一年十一月までの一年間、讓治は岡山第十七師団輜重兵第十七大隊に入隊したため、この間大学を退学し、一九一二年に再入学することとなる。この入隊については、徴兵検査延期願を出すのを忘れたためであり、この書簡では、その経緯において、讓治は未明にその顛末を話していたことがわかる。

3 讓治は、この前年一九〇九（明治四十二年）年三月に「人生問題に思い悩み、退学して帰郷」（『坪田讓治全集』第12巻「年譜」）していた。讓治三男坪田理基男氏の学籍調査によると、讓治は一九〇九年四月二十五日付で退学し、九月七日付で再入学した際には、未明が保証人となつての再入学だったという。未明はこれらの経緯と心情にも配慮して、すでに岡山に帰郷している讓治を慰めていると思われる。

書簡02 一九二二（大正元）年十一月五日

「消印」 小石川／1・ 11・ 5／后01

「封書」 大日本帝國郵便 三錢切手貼付

「筆記具」 黒インク

「封筒表面」 相州茅ヶ崎／南湖院内／坪田讓治様

〔封筒裏面〕東京小石川区／老松町四十三／小川健作

十一月五日。

〔用箋〕便箋一枚

御病氣が大して悪くないので何より安心いたしました。

此の手紙と同時に学校へ缺席届送りました。何卒御承知願います。丸山君に時々おあいださうですが宜しく言つて下さい。御地は暖かでいゝと羨ましく思います。私は寒がりです。曇った日などたゞちに去年行つた伊豆山が恋しくなります。目下新年早のため忙しくあります。早く癒つて帰つて来たまへ。お大事に願います。

五日朝

未明生

坪田兄 机下

注1 一九一二（大正元）年九月、讓治は肺炎カタルで神奈川

県茅ヶ崎の南湖院に入院することとなった。翌一九一三（大正二）年八月には退院し復学する。

書簡03 一九一三（大正二）年四月二三日

〔消印〕小石川／2. 4. 23／后8-9

〔葉書〕大日本帝國郵便 一錢五厘郵便はがき

〔筆記具〕黒インク

〔葉書表面〕相州茅ヶ崎／南湖院内／坪田讓治様

小石川区高田老松町／四十三／小川健作

四月二十三日夕

〔葉書裏面〕

缺席届け、あのはがきと同時に学校の方へ送りました。

花も散つてしまつて、若葉の時節が来しました。もうとくにお歸りになつてゐるものだと思つてゐましたところ、今あなたの手紙に接してあなたの身の上を案じてゐます。静かに、お牀を御養生なさいまし。晩春の海、松林、（三字不明）逍遙なさつたら、きつと初夏の時分までには完全に御健康になれること、信じてゐます。私にはあのナザンスキイの人生觀が身にしみて切なく思はれました。此春あの「決闘」の一節を御覧になつたこと、思ひます。生きてゐるのが即ち幸福其地で、人は生を愛さなければならぬと共に思はなければならぬものです。かへすゝも貴兄の御健康を祈つてゐます。

注1 「ナザンスキイ」は、ロシアの作家アレクサンドル・ク

プリーン（一八七〇—一九三八）の長編小説『決闘』のな

かの登場人物名。

書簡〇４ 一九一三（大正二）年六月二十三日

〔消印〕 神奈川茅ヶ崎／2. 6. 24／前〇・3

〔封書〕 切手なし

〔筆記具〕 黒インク

〔封筒表面〕 相州茅ヶ崎／南湖院病室／坪田讓二様／親展

〔封筒裏面〕 東京小石川区／高田老松町四十三／小川健作

六月二十三日午前

〔用箋〕 便箋一枚

只今お手紙拝見いたしました。常に何うなされたかと思つてゐながら、つい手紙も出さずすみません。ほんたうに人間の生活ほど分らないものはない。私もつくづく感じます。此頃は子供がはいから肺炎になつて入院した時、つゞいて私が病氣になつた時つくづく生活といふものが考へられた。しかしどうにかなると行くというやうな考へもあつた。これは全く運命といふものは豫め分らないといふ人間の一種の自暴自棄の形です。けれど尤も強くなければならない。もとより人格を言ふのであります。

昨日も電車の中でふと、生田蝶介君に出遭つて、久しぶりで話

をしました。立派な紳士といふ氣持がしました。話はいつも君の身の上に及びます。同君も君のことを心配してゐました。青鳥会の連中はいつみんな集つて親しく話をする事が出来るでせう。みんな達者で働いてゐるのに、君独り病院にゐられるのはどんなに私は考へると悲しくなるか知りません。早くなほつて此方へ来て下さい。君と将棋を差したことを先日も思い出して、しばらく茫然としてゐました。

徴集の件、三週間も兵役については體に障ることは明かです。何とか病院から診察證をもらつて猶豫をするやうになさいまし。是非此の方に御尽力なさいまし。既に幾月も入院してゐた事実もあることです。それから、病院も兵隊の方も双方とも君に同情をするべき筈です。それでもどうしても、行かなければならぬいなら仕方がありません。行くのです。このことは君を強くします。かういふ實理なこと、人事、運命に出遭つて、強くなるのです。氣で病氣と、周囲に打ち勝ちなさい。きつと君は強い人になつて帰ります。私は君の強い思想と作物に接する心を期待してゐます。

お互に苦しい生活を送つてゐます。二三年前の君も私も、餘程お互に境遇が異なつたやうです。君も修養しました。私も随分生活に苦しんで來ました。お互に勇士となつて力の限り戦いま

せう。

明日とか来年とかいふことは、全く考へても分りません。未来は明暗共に分りません。これが人生です。私は病氣がなほつたばかり、毎日疲れた體で原稿を書いてゐます。お察し下さい。君の境遇のvariety次第、お手紙下さい。私は君のことを思つてゐない日はないのです。どうか自愛して下さい。

六月二十三日正午頃

讓二兄 御許

未明生

注1 一九一四（大正三）年十二月二十三日、長男哲文は疫痢

のため六歳で逝去するが、それはこの書簡の翌年のことである。

2 生田蝶介（調介）は、讓治と早稲田大学予科で同級となり、すでに未明の門下となつてゐる立場から、讓治を未明に紹介した人物である。

書簡05 一九一七（大正六）年二月二十八日

〔消印〕牛込／6. 2. 28／后8-9

〔葉書〕逋信省發行 印刷局製造 大日本帝國郵便 一錢五厘

郵便はかき

〔筆記具〕黒インク

〔葉書表面〕市外、高田村上り屋敷／婦人の友社裏／坪田讓治様

牛区、矢来町一／三十八、小川生

〔葉書裏面〕

拝啓

まだばら、お買ひ下されんならば、見合（生）せ下さいまし。僕も今年（生）は植木をやめて、旅行でもしやうと思ひます。着し拝眉の上

匆々

二月二十八日夜

注1 植木は、未明と讓治とが共有する趣味であつた。

書簡06 一九二五（大正十四）年九月三日

〔消印〕小石川／14. 9. 3／前9-10

〔葉書〕大日本帝國郵便 郵便はかき 一錢五厘

〔筆記具〕黒インク

〔葉書表面〕市外、高田町上り屋敷／狐塚八六五／坪田讓治様

小石川雜司ヶ谷町／七十六 小川健作

九月三日

〔葉書裏面〕

皆様お変わりありませんかお伺ひ申上げます。<sup>(注)</sup>三年前の今日を思ひ出していろ／＼御親切に、お世話にあづかりましたことを家内中で仕合つて感謝いたしてゐます。「鉄槌<sup>鉄2</sup>」にお書き下さいまして有がたう存じます。早く拝見いたしたいと思ひますが、雑誌が近所の本屋にまゐつてゐません。どうぞお送り下さるようお願いいたします。餘は着しお目にかかつて  
匆々

注1 二年前のあやまりと考えられ、二年前の関東大震災での

出来事を思い出したのだと推測される。関東大震災直後の数日間、小川家一家は坪田家に避難し過<sup>過</sup>ごしている。

2 雑誌『鉄槌』では、本書簡によると譲治は未明の書評を発表しているとされ、次の書簡7でもその内容に触れているが、この雑誌の存在が国立国会図書館等にもなく現在確認できないため、詳細は不明。なお、譲治生前発表の『坪田譲治全集』第十二卷（一九七八年五月 新潮社）の「坪田譲治年譜」では、一九二五（大正十四）年の年に、「子供<sup>子</sup>の憂鬱」「雷雨」を『鉄槌』に発表」と記載している。

書簡07 一九二五（大正十四）年九月三日

〔消印〕 小石川／14. 9. 3／后3-4

〔葉書〕 大日本郵便 一銭五厘 郵便はがき

〔筆記具〕 黒インク

〔葉書表面〕 市外、高田町上り屋敷／狐塚八六五、／坪田譲治様

小石川、雑司ヶ谷町／七十六 小川健作

九月三日

〔葉書裏面〕

先刻はがき差上げましたが、只今「鉄槌」をいたゞきました。そして、私の御批評を拝見いたしました。「藝術即眞理」に考へて来た私は、自からをリアリストとまで思つて、理想主義者だと知らなかつたところに缺陷があつたのです。性急なところも、そこにあつたのか知れませんが、この強要に無理があるなら、人生に対する幻滅が感ぜられる譯です。選集の廣告がありがたう存じます。どれ程、力になつたか知れませんが。厚く御禮申上げます。いづれお目にかゝつて着し申上げます。どうぞ、奥様によりしく。  
匆々

書簡08 一九三五（昭和十）年七月十一日

〔消印〕 中野／10. 7. 11／后0-4

〔葉書〕 日本郵便 一銭五厘郵便はがき

〔筆記具〕 ブルーブラックインク

〔葉書表面〕 豊島区雜司ヶ谷六ノ八六六／坪田讓治様

杉並区高圓寺一ノ五一二／七月十一日／小川健作

〔葉書裏面〕

大分お暑くなりましたが、その後皆様お変わりも御座いませんか、お伺ひ申し上げます。只今、高著「魔法」をいたゞきました。ありがたく深謝いたします。不断の御健闘に対して、ひたすら敬意を表してゐます。どうぞ、お躰お大事にいゝものを書いて下さい。先づ、とりあへず御禮申し上げます。乍末筆奥様によろしく。 勿々

注1 童話集『魔法』（一九三五（昭和十）年七月 健文社）

のこと。讓治が雑誌『赤い鳥』に掲載した作品が収録された初めての童話集。

書簡09 一九三七（昭和十二）年六月八日

〔消印〕 中野／12. 6. 9／前0-8

「航空日本の建設は／愛國切手で」の印

〔葉書〕 日本郵便 二銭郵便はがき

〔筆記具〕 ブルーブラックインク

〔葉書表面〕 豊島区雜司ヶ谷／六一八六六／坪田讓治様

杉並区高圓寺／一―五一二／六月八日 小川健作

〔葉書裏面〕

毎日鬱陶しい天氣がつゞきますが、皆様お変わりも御座いせんか。只今「児童劇場」の御隨筆を拝見して、また、今昔の感に堪えません。十年餘もあの邊へ行つて見ませんが、大分早稲田附近も變つたであります。「お話の木」へどうぞお書き下さるようお願いいたします。奈街君が上りますけれど。奥様によろしく。一度お話にいらして下さい。 勿々

注1 雑誌『児童劇場』は、劇団東童（宮津博）が児童劇場社

から発行した雑誌（全六卷 一九三六年八月―一九三七年七月）。この書簡の前年一九三六（昭和十一）年四月に、讓治の小説「お化けの世界」が劇団東童により上演されていることから関係が生まれている。雑誌『児童劇場』第二卷第一号（昭和十二年五月）には小説「風の中の子供」の脚本が掲載されている。讓治の隨筆が掲載された『児童劇場』については不明。

2 雑誌『お話の木』は、未明が一九三七（昭和十二）年五月に主宰、創刊した児童雑誌。未明は、この雑誌に「花の



咲く前」(一九三七年五月)、「相撲」(同年六月)、「白い雲」(同年七月)等を発表し、これらを集めて『未明童話 お話の木』(一九三八(昭和十三)年四月 竹村書房)を発行している。  
3 「奈街君」とは、奈街三郎(本名山田三郎 一九〇七—一九七八年)で、小川未明に師事して児童文学作家となった。雑誌『お話の木』では編集担当。

書簡 〇10 一九四〇(昭和十五)年五月十日

「消印」 杉並／15. 5. 10／后04

「封書」 大日本帝國郵便四錢切手貼付

「筆記具」 黒インク

「封書表面」 豊島区雜司ヶ谷六ノ八六六／坪田譲治様

「封書裏面」 杉並区高圓寺一ノ五二二／五月十日 小川健作

「用箋」 青色点線野線16行便箋 二枚

〈第一葉〉

拝啓

いつしか晩春の候となりましたが、その後お变りも御座いますか。

先日はお忙し<sup>ママ</sup>中を童話春秋社へ行っていただきまして有難う存じました。やうやく昨日平賀氏参り委細の件とりきめました。

即ち印税は實数高の一割とし、編集に對するお禮は直接お目にか、つて御相談すること、そして、直にも取りか、つて差支へなきこと、契約書はいづれ取交すこと、廣告もすることなどでありまして、こゝに全集の決定を見ましたから、何卒御安心下さるやう願います。長き文筆生活の総決算日が、遂に來たかと思ふとまた、無量の感慨を禁じ得ません。御承知の如く

〈第二葉〉

何分にも多冊にて、お骨折の程も一通りでないと存じますが、どうぞよろしく願申上げます。平賀氏も一兩日中にお伺しますといつてゐました。小生墓参のため明日田舎へ行き、十五日には必ず帰京いたしますから、その上にて、新井君と三人にて一度協議をして、早速原稿の製作にとりかゝりたいと存じます。その節いろ／＼の御意見を伺します。明治書院<sup>(生2)</sup>の方は、お進みでございませう。野尻<sup>(生3)</sup>へはお出かけでしたか。いづれ着し拝啓の節を期してゐます。

くれぐれも奥様によろしくお傳へ願います。

五月十日

小川健作

坪田譲治様

侍史

注1 「童話春秋社」は、未明が一九三九（昭和十四）年六

月に童話集『竹トンボ』を出版した出版社。譲治も、一九四〇（昭和十五）年一月に童話集『善太と三平』を童話春秋社から出版している。この出版社で未明の全集の企画が進行し譲治も関わっていたようだが、書簡012にもあるようにこの出版は実現しなかった。「平賀氏」は、童話春秋社の編集者か。「新井君」は、新井紀一であり、未明の門下。

2 「明治書院」は、未明が一九四一（昭和十六）年一月に明治書院から『大きな蟹』を出版した出版社であり、譲治がその編集と「解説」を手掛けていることから、この文面はその進行の確認を行ったもの。

3 「野尻」とは、譲治が（一九三九昭和十四）年四月に初めて信州野尻湖に遊びに行くようになってからしばしば訪れるようになった地。次の書簡011・012・013は滞在中の野尻あてになっている。

書簡011 一九四〇（昭和十五）年五月二十六日

〔消印〕 杉並／15. 5. 26／前3―12

〔葉書〕 大日本帝國郵便 二銭郵便はがき

〔筆記具〕 ブルーブラックインク

〔葉書表面〕 長野縣野尻湖／小松屋旅館方／坪田譲治様

（注1）  
東京都杉並区高圓寺／一ノ五一二

五月二十六日 小川健作

〔葉書裏面〕

御當地はいかゞで御座いますか。

先日信越國境<sup>（注1）</sup>を過ぎ、まだ山々の向きを見て寂涼の感に打たれたのです。あの後童話春秋社が上りましたでせうか。お帰りを待つて、新井君と三人で御協議を願ひ、全集の話を進めたいと思つてゐます。いつ頃御帰京でせうか、お知らせ下されば仕合に存じます。どうぞお大事に。  
東京も昨日の慈雨で、萬物生色を帯びました。

注1 小松屋旅館は、譲治が野尻湖に訪れる時の定宿であつた。

次の書簡012・013の宛先も同じ。

2 「信越國境」について、未明は故郷に帰る時、信越本線で越えているが、譲治の滞在している野尻湖付近を通ることから、譲治の滞在先を身近に感じているといえる。

書簡012 一九四〇（昭和十五）年六月三日

〔消印〕 杉並／15・6・3／后04

〔封書〕 大日本帝國郵便四錢切手貼付

〔筆記具〕 黒インク

〔封筒表面〕 信州野尻湖／小松屋方／坪田讓治様／御直披

〔封筒裏面〕 東京杉並区高圓寺／一ノ五二／六月三日小川健作

〔用箋〕 便箋 三枚

### 〈第一葉〉

その後いがゞお暮らして御座いますか。

この頃毎朝小鳥の放送を聞いてゐますが、静かな湖畔の風景はどんなにかいゝこととせう。

早速ですが、三十一日その後の経過を知らうと思つて童話春秋社へまゐり篠崎氏に面會しました。その節他からの意見でもあり、未明全集としては、社の者に相應しくないし、童話全集に改めてくれないかといふのです。一應尤もと感じましたが、既に未明童話集があり、小生の初志は全集にあつたので、考へ直さなければならなくなりました。今度のことは、童話春秋社が三週年<sup>マツ</sup>紀念として、これまでの型を破り、立派なものを出すといふ

### 〈第二葉〉

ことに、こちらでも動いたのですが、いつしかその精神がなくなつ

て、商品本位に考へ、学年童話並に取扱はうとするなら、決して、こゝから出す必要はないのです。約束したのですから、全集として、無理にも押通せぬこともないでせうが、先方に能動的なところが無いものに、今後交渉するのにも面倒ですし、それに童話だけとすると、貴兄はお忙しいことでもあるし、新井君は畑違ひにて、一人では作品を撰擇しかねるし、他にもう一人入れてもいゝといひますが、編輯費は一冊いくらといふことですから、所詮不可能のこと、考へ、帰つてから其日に出版見合せの通知を出したのであります。貴兄にはお目にかゝつてお話ししようと思ひ、新井君にだけ同時にその旨を通知

### 〈第三葉〉

しました。

いろ／＼御心配をかけましたが、右のやうな次第にて不悪御諒察下さるやう願います。

次に、明治書院の方、ありがたう存じました。

先日土屋様が見えて、原稿が少し足りないとのことですから、三四篇お渡しました。

何卒御解説よろしくお願申し上げます。

不日拝眉を期して萬々申上げます。どうぞお大事に。

六月三日

草々

坪田讓治様

小川健作

御案下

書簡 O 13 一九四〇（昭和十五）年六月八日

〔消印〕 杉並／13. 6. 8／前8-12

〔葉書〕 大日本帝國郵便 二銭郵便はがき

〔筆記具〕 ブルーブラックインク

〔葉書表面〕 信州野尻湖畔／小松屋旅館／坪田讓治様

東京杉並区高圓寺／一五二／六月八日小川健作

〔葉書裏面〕

お手紙有難く拝見いたしました。

いろいろ御心配をおかけしてすみませんが、全くそんな譯ではないのです。小生他の観黙から厭氣がさしたので、いづれお帰りになりましたら、お目にかゝつて申上げます。東京雨が少なく水になやんでゐます。お體お大事に。お帰りの日をお待ちいたします。草々

書簡 O 14 一九四二（昭和十七）年四月二十六日

〔消印〕 杉並／17. 4. 27 前8-12

〔「数字分不明」べ適材／「数字分不明」け征戦〕の印

〔葉書〕 大日本帝國郵便 二銭郵便はがき

〔筆記具〕 黒インク

〔葉書表面〕 豊島区雑司ヶ谷／六ノ八六六／坪田讓治様

杉並区高圓寺／一五二／四月二十六日小川健作

〔葉書裏面〕

拝啓 先日はお忙しいところ御出席下さいまして有難う存じました。また新潟に書いて頂きまして深謝いたします。本日は御高著「虎彦龍彦」正に拝受いたしました。愉しく拝見させていただきます。いづれ着し拝眉の節に譲り先は不取敢厚く御禮申上げます。どうぞ皆様によろしく。草々

注1 『虎彦龍彦』は、一九四一（昭和十六）年九月より

一九四二（昭和十七）年一月まで『都新聞』に連載され、

一九四二年四月に新潮社から刊行された。

書簡 O 15 一九四四（昭和一九）年四月二日

〔消印〕 杉並／19. 4. 2／〔判読不明〕

〔葉書〕 大日本帝國郵便 二銭郵便はがき 一銭切手貼付

〔筆記具〕 黒インク

〔葉書表面〕 豊島区雑司ヶ谷／六ノ八六六／坪田譲治様

杉並区高圓寺／一―五二二／小川未明

〔葉書裏面〕

一恙なく御帰京なさいまして大慶に存じ上げます。<sup>(注)</sup>南方はいかゞでしたか。洵にいゝ経験をなさいました。その後こちらも僅かな間にいろゝ変化が御座いました。お疲がなほりましたら一度お話を伺ひたいと存じます。どうぞお大事に祈り上げます。

草々

注1 譲治は、一九四三（昭和十八）年七月から一九四四（昭和十九）年三月まで、海軍報道班員として徴用され、南方スラバヤに行っていた。台湾、マニラ、マカッサルを経て、スラバヤに約半年滞在し、ボルネオ、セレベス、フィリピン、上海を経て帰国した。

書簡O16 一九四五（昭和二十）年八月十一日

〔消印〕〔判読不能〕・ 8・ 11・／〔判読不能〕

〔葉書〕 大日本帝國郵便 五銭郵便はがき

〔葉書表面〕 長野縣上水内郡／信濃尻村 野尻／坪田譲治様  
東京都杉並区／高圓寺一ノ五二二／小川未明

八月十一日

〔筆記具〕 黒インク

〔葉書裏面〕

その後は御無沙汰いたしました。お変わりも御座いませんかお伺ひ申上げます。山中の湖畔には秋の訪れるのも早いでせう。此方も鯛が鳴くやうになりました。たゞ毎晩の如く起きなければならず、この頃足がふらゝします。妻の郷里長岡も焼<sup>(注)</sup>けて老年安住の地なきを寂しく感じます。塚原君は轉居したやうですか。貴兄は相変らず釣<sup>(注)</sup>をなされてゐますか。都鄙の別なく人心の荒廢驚くばかりです。すべて根底なき文化と形式主義の爲すところ です。時節柄切にて自愛祈り上げます。どうぞ奥様によろしく。

注1 未明の妻キチの実家は長岡にあり、一九四五（昭和二十）年八月一日から二日にかけて長岡市の中心部に焼夷弾が投下され、市街地の約八割が焼失した。

2 「塚原君」は、塚原健二郎（一八九五（明治二十八）年―一九六五（昭和四十）年）。一九二〇（大正九）年に未明から紹介され、雑誌『おとぎの世界』へ童話「弘法様のお像」を発表。その後、「赤い鳥」等で童話作家として活

躍をはじめる。

3 譲治は、一九四五（昭和二十）年四月末に、野尻湖畔に疎開した。譲治は野尻湖で釣りに親しんでおり、そのことが未明にも伝わっていたと思われる。

書簡017 一九五四（昭和二十九）年八月七日

〔消印〕 杉並／29. 8. 7 後6-12

〔葉書〕 日本郵便 五円郵便はがき

〔筆記具〕 黒インク

〔葉書表面〕 豊島区雑司ヶ谷六ノ八六六／坪田譲治様／座下  
杉並区高圓寺一の四六四／八月七日 小川健作

〔葉書裏面〕

炎暑の砌お伺い申し上げます。

お國の名産白桃<sup>（注）</sup>を忝うも拝謝いたします。甘味ゆたかに香氣高くまことに夏の王座と存じました。お蔭さまで一家大喜びでございます。

ありがたく御禮申し上げます。

どうぞ奥様にもよろしく 拝具

暑さの時分御大切に。

注1 譲治は一九五九（昭和三十四）年八月、郷里岡山より白

桃を取り寄せ弟子にふるまう「桃の会」と称した会を自宅で開くようになるが、この書簡はその五年前である。

書簡018 一九五四（昭和二十九）年十二月二十九日

〔消印〕 杉並／29. 12. 29 後3-6

〔葉書〕 日本郵便 五円郵便はがき

〔筆記具〕 黒インク

〔葉書表面〕 豊島区雑司ヶ谷／六の二一八五／坪田譲治様  
杉並区高圓寺／一ノ四六四／十二月二十九日 小川未明

〔葉書裏面〕

拝啓 愈々本年も押し迫りましたが皆様は佳勝のこと、大慶に存じ上げます。本日は御郷里よりお珍らしき佳者が贈りを忝うしまこと有難く拝謝奉ります。小生も風邪より坐骨神経を起し大に悩みましたが目下快方に向いました。御安心下さい。

どうぞ皆様お体御大切に、新年をお迎えなさるようお祈り申し上げます。先は御禮まで。

匆々

書簡019 一九七〇（昭和四十五）年五月十四日（奈街三郎筆）

〔消印〕 豊島／45・5・14／18・24

〔封書〕 日本郵便十五円切手貼付

〔筆記具〕 ブルーブラックインク

〔封筒表面〕 188都下久留米町学園町一丁目14・9。／坪田讓治先生。／侍史。

〔封筒裏面〕

五月十四日／杉並区高円寺南一・26・一。／未明忌世話人会。

〔便箋〕

〈第一葉〉

啓上。

本年の未明忌には御多用中を御参会いたゞき、その上多分の御花料まで頂戴いたしました、誠にありがとうございました。

おかげさまで大へん意義のふかい会になりました感謝にたえません。

厚く御禮申し上げます。

〈第二葉〉

未筆乍ら、御自愛第一のほどをお祈りしております。

五月十四日

未明忌世話人会。

奈街。

坪田先生。

侍史。

出

注1 小川未明は、一九六一（昭和三六）年五月十一日に逝去

する（享年七十九歳）。その際、讓治は葬儀委員長をつとめた（当時 七十一歳）。この書簡は、没後九年目の未明

忌を終え世話人奈街三郎が出した讓治への礼状である。讓治八十歳の年である。

【小川未明あて坪田讓治書簡】（小川未明記念館蔵）

書簡T1 一九五三（昭和二十八）年十一月四日

〔消印〕 落合長崎／28・11・4／後6・8

〔封書〕 日本郵便十円切手貼付

〔筆記具〕 黒インク

〔封筒表面〕 杉並区高円寺一ノ四六四／小川未明先生／侍史

〔封筒裏面〕 十一月四日／豊島区雑司ヶ谷／六丁目一一八六

坪田讓治

〔用箋〕 四〇〇字詰原稿用紙（S・M印 A・2）10・20二枚

〈第一葉〉

小川先生

侍史

十一月四日

坪田譲治

おめでたう存じます。と申し上げましても、これは先生個人に申し上げるものではありません。吾國の現代童話を代表する作家としての先生に申上げるのであります。今朝の新聞を見ますと、芸術院会員と、文化功勞者<sup>(金十)</sup>としての候補に先生の名があがつて居ります。それに今日、朝日新聞社で高山毅<sup>(金十)</sup>氏に会いましたところ、今度こそ大丈夫だと申して居りました。先生にとつては、或は御迷惑かも知れませんが、そういふところに御出ましになり、童話と、その作家の位置を、児童のため作家のため、大に主張して下さいますやう願ひ申上げます。尤も主張して下さいませんが、會員になられ、功勞者になられますだけで、童話なり作家なりが彼等

《第二葉》

に認識されたわけで、作家の一人として有難い次第で御座います。これも先生の五十年に渡る御骨折と、その輝しい高作の力でありまして、何か、有難う存じますと申上げなければならぬいやうな氣も致します。

実は今朝にも参上、御拝眉の上右申上げたいと思いましたが、少し忙しいことがありますて、失礼致します。いづれ近日参上致し、万々申上げたう存じます。

どうか此上は吾國の童話文学のため御加饗御節酒遊ばされ、百までも二百までも御長命になりますやう、心からお祈り申上げます。

末乍ら、奥様よろしく御鳳声下さいませ。

早々敬白

注1 未明はこの年十一月に、芸術院会員、文化功勞者となる。

2 「高山毅」(一九一一(明治四十四)年—一九六一(昭和三十六)年)は、朝日新聞社員であり、文芸および児童文学の評論家。

書簡T2 一九五八(昭和三十三年)一月一日

「消印」東京中央／33. 1. 1 年賀

「葉書」日本郵便 四十一円 一九五八年年賀・郵便はがき

「筆記具」ブルーブラックインク

「葉書表面」杉並区高円寺一ノ四六四／小川未明先生

「葉書裏面」(全て印刷・絵入り(明治の春)・日の丸と少年と犬)



謹賀

新年

昭和三十三年元旦

坪田譲治

東京都北多摩郡久留米町  
南沢学園町六五  
電話（田無）五七七

書簡T3 一九五九（昭和三十四）年一月一日

〔消印〕豊島／34. 1. 1 年賀

〔葉書〕日本郵便 四十一円 一九五九年年賀・郵便はがき

〔筆記具〕ブルーブラックインク

〔葉書表面〕杉並区高円寺一ノ四六四／小川未明先生

〔葉書裏面〕（全て印刷・絵入り（猪））

迎春 元旦

坪田譲治

都下北多摩郡久留米町

南沢学園町六五 電（田無）五七七

書簡T4 一九五九（昭和三十四）年二月五日

〔消印〕東京・田無／34. 2. 6／後0-6

〔封書〕日本郵便十円切手

〔筆記具〕ブルーブラックインク

〔封筒表面〕東京都杉並区高円寺一ノ四六四／小川未明先生／

侍史

〔封筒裏面〕二月五日／北多摩郡久留米町／南沢学園六十五／

坪田譲治

〔用箋〕四〇〇字詰原稿用紙〔TOYA NO.11 20×20〕二枚  
〈第一葉〉

小川先生

侍史

二月五日

坪田譲治

御無沙汰して居りまして相済みません。

この間岡上さんにお目にかかりまして、先生の御様子拝承いたしました。やはり御足が充分で御座いませぬ御由、何かにつけ、御不自由のことと存上げます。それにつけても、私、時々参上いたし、お見舞も申上げたいと思えますけれども、それがまた私の耳がますます聞こえなくなりました、今では補聴機と申しますキカイなくては、雑談もむづかしく、困ったことで御座います。

実はその難聴につきまして、未明文学賞<sup>(註)</sup>の選考委員を、今年は辞退いたしたう存じますが、先生のお許し戴けませんでしょうか。お願い申し上げます。この間、その世話人会が御座いまして、その席で、

## 〈第二葉〉

わたくしの難聴いよいよ激しく、到底、会議などに参加できないからと、みんなの了解を求めましたところ、先生のお許しが第一と申しますもので、どうか、私の難聴につき、御諒察賜はりたう存じます。未明文学会の代表のような名義人にもなつて居りますので、選考の会に出て、難聴に苦しむ方は、どうかお許し下さいますよう、お願い申し上げます。

いづれ、そのうちお伺い申し上げ、お目にかかりまして、万万御了解いただく所存に御座いますが、とりあえず、書面で失礼致します。お許し下さいます。

末乍ら、奥様よろしく御鳳声下さいませ。

注1 「未明文学賞」は、未明による未明文学会が創設した文学賞で、一九五八（昭和三十三年）から未明が亡くなる一九六二（昭和三十六年）まで行われていた賞。

書簡T5 一九五九（昭和三十六年）一月五日

「消印」田無／36. 1. 5 前8-12

「葉書」日本郵便 郵便はがき 五円切手貼付

「筆記具」黒インク

「葉書表面」杉並区高円寺一ノ四六四／小川未明先生／侍史

「葉書裏面」（全て印刷・横書き・絵入り（牛））

迎春 1967年元旦

坪田譲治

都下北多摩郡久留米町

南沢学園町 ☎ 電（田無）577

## 解題

小川未明と坪田譲治―書簡から見る師弟関係

小川未明と八歳年下の坪田譲治は、それぞれ二十六歳と十八歳のときに出会って以来、未明が七十九歳で亡くなるまでの五十数年の歳月を共に過ごした。その関係は、師弟としての交流のなかで相互に強く支えあった関係であるといえる。

今回の両者の書簡は、その五十数年の歳月のうち、譲治書簡五点が戦後の時代のものであるのに対して、未明書簡十八点はそ

の交流の最初から最後にまで及んでいることで、両者合わせて、お互いへの思いを知ることができる貴重な資料となっている。

まずは、讓治の早稲田大学時代（一九〇八（明治四十二）年四月―一九一五（大正四）年六月）にあたる間の未明書簡では、大学の先輩である作家としての未明の讓治に対する面倒見の細やかさには身内のように深い愛情が込められている。

さらに未明の讓治に対する文学面の後進への期待については、讓治が随筆で、初めて訪れた頃の未明の様子について「年少の私はその頃まだ文学的な作品一つ書いていなかった。言う迄もないことであるが、先生はそれでも私を一人の作家でもあるように対応せられた」「わが師・わが友『新潮』一九四六（昭和二十一）年四月号」と書いていた。それは、今回の未明書簡で「君の強い思想と作物に接する心を期待してゐます」「私は君のことを思つてゐない日はないのです」（書簡〇四）という讓治の内面に信頼と期待を寄せる強い思いとして表されており、注目に値する。

次に、讓治の卒業後から大正末頃までの関係をみると、讓治は卒業の翌年一九一六（大正五）年に結婚して東京での家も構える。この時期、未明は何度も転居を繰り返したが、お互いの住居は近かったため、讓治が岡山の家業の仕事に従事した

一九一九（大正八）年から一九二三（大正十二）年までの四年間を除いて、讓治の大学時代と同様に、頻繁な行き来がなされていたといえる。

そのなかで讓治文学の発表が開始されるが、その初期の発表先には、未明が新浪漫主義文学の研究会「青鳥会」を發展させて創刊した労働文学の雑誌『黒煙』があり、また讓治の文学者仲間もこの「青鳥会」の関係者から広がっている。

このように讓治は未明のもとで、『黒煙』をはじめとする様々な執筆への導きを受けているが、未明は一九二五（大正十四）年の書簡〇六・〇七によると、讓治に「批評」を書いてもらいその内容を謙虚に受けとめる姿勢を示していることは注目されよう。

続いて、昭和に入ってから終戦までの動きに関しても、引き続き書簡〇九のように、未明は自らの主宰する雑誌『お話の木』等に讓治の執筆を求めたり、讓治の発表した作品を随時受け取って読んだりしている。

そのようななかで、書簡〇一〇～〇一三のように、讓治は未明の意を汲んで出版の交渉や編集に尽力している様子がみられ、未明も讓治の努力に対して「お骨折りの程も一通りでない」と、支えられている喜びと感謝を述べている。

さらに終戦直前の書簡〇16で、終戦まで杉並の自宅で過ごす未明は、野尻湖畔に疎開している譲治へあてた文章のなかで、妻の郷里長岡の空襲について「老年安住の地なき」を嘆き、「人心の荒廢」に驚愕しているなまなましい心境を表現している。戦後においては、未明書簡〇17・〇18から、譲治が八月の白桃と十二月のお歳暮の贈答品を故郷岡山から送っていることがわかる。

また、譲治書簡T1によって、譲治は未明の芸術院会員と文化功労者となった出来事を、個人としての喜びを伝えることはもちろん、広く児童文学界の隆盛の賜物となる喜びとして、未明に伝えていることが解される。

加えて、譲治書簡T4では、未明の亡くなる二年前において譲治は未明の足の不自由さを心配しながら、当時六十九歳になる譲治が「雑談もむつかし」いほどの難聴に苦しむために、未明文学賞の選考委員の辞退について未明に許しを請う状況になっていたことが知られる。

なお、譲治は未明の逝去した一九六一（昭和三十六）年五月に葬儀委員長をつとめたが、そののちの書簡〇19から、当時八十歳の譲治は、かつて葬儀委員長をつとめた立場から師への感謝と使命感をもって未明忌に参加していたと思われる。

以上のように、これらの書簡は、小川未明と坪田譲治の作家と作品の形成上の重要な交流が見出されるものであり、今後の両作家それぞれの研究の発展において新たな深い意味をもたらす貴重な資料であるといえる。

※今回の書簡発表に関して、坪田譲治の孫にあたる坪田眞紀氏には公表の許可とご協力を賜りましたこと、深謝申し上げます。

※書簡を所蔵する吉備路文学館と小川家ならびに小川未明文学館には、調査研究のご協力をいただき感謝申し上げます。

（やまね ともこ／本学教授）

キーワード＝早稲田大学、吉備路文学館、小川未明文学館